1 事業名	試験研究調査費	予算額	23,600	千円
2 事業細目	（試験研究調査項目）	予算額	1,100	千円
	ブラックバス対策総合調査研究（生態調査、加工研究）			
3 期間	60年度～62年度	予算区分	県単	
4 担当者	田中、氏家、津村、井嶋			

5 目的　琵琶湖におけるブラックバスは、その繁殖力のおう盛さと、食肉性から、在来の水産資源への影響が懸念され、その生態の究明と効果的な駆除方法の検討、並びに、副産物的に漁獲されたブラックバスの利用・加工研究が急務となっており、これらが本研究の目的である。

6 方法

(1) 定点調査：産卵生態を中心に季節的移動を調査する。

(2) 産卵場マップ作成調査（北湖）：ブラッスバスの産卵場の有無を、琵琶湖を2Km四方のメッシュに区切ってそのうち、沿岸20ケ所について実地踏査して確認し、産卵場となりうる場所を明らかにして、その分布地図を作成する。

(3) 飼育試験：水槽で馴致したブラックバス（平均体型3タイプ）にアユ、スジエビを摂餌させ、摂食量、餌料転換効率を求めた。試験期間は2ケ月。

(4) 胃内容物調査：60年度に収集したブラックバスのうち、刺網、地曳網による漁獲物を主体に胃内容物の主要組成と体型別館食胃内容重量を求めた。

(5) 生殖腺熟度調査：60年度に収集したサンプル692個体について生殖腺の大きさを調査した。

(6) 利用・加工試験：ブラックバスの水揚げ後の鮮度低下状況、冷凍中の品質低下状況の分析。

7 結果の概要

(1) 定点調査　ヨシ地内でも産卵床を確認。産卵床のないのは、泥地のみである。

ア　孵化後数日間は、親魚は保護する。

イ　7月以降、カナダモが枯死すると、親魚の姿はみられず、未成魚が索餌回遊してくる。

(2) 産卵場マップ（北湖）右図1．参照

ア　湖東部には、産卵床は殆んどなく、湖北、特に大浦湾に非常に多い。

イ　産卵床適地は、風波が少なく、アミミドロの繁茂しない湖岸で、ごくゆっくりした湖流のある水深1～3mの岩場あるいは、砂礫地と推定され、ヨシ地内も可能である。

産卵床の多い湖岸には、ヨシノボリやスジエビは少ない。

(3) 飼育試験　アユを摂餌させた場合、増肉係数は、体重700gのもので14.1であった。

スジエビを摂餌させた場合、増肉係数は、体重200gのもので10.9、体重40gのもので、7.8であった。

(4) 胃内容物調査

ア　表1参照。魚類（モロコ、フナ、コアユ、ヨシノボリ、セーセーラ、ブラックバス他）エビ類（スジエビ、テナガエビ）が主な餌料生物と思われる。

イ　胃の膨満している個体について、体重と胃内容重量との関係を求め、図3に示した。

(5) 生殖腺の月変化　図2参照。産卵期は4月中旬～6月下旬。主に産卵に参加するのは、被鱗体長23cm以上と思われる。

(6) 利用、加工試験：分析中

8　主要成果の具体的数値（図・表　等）

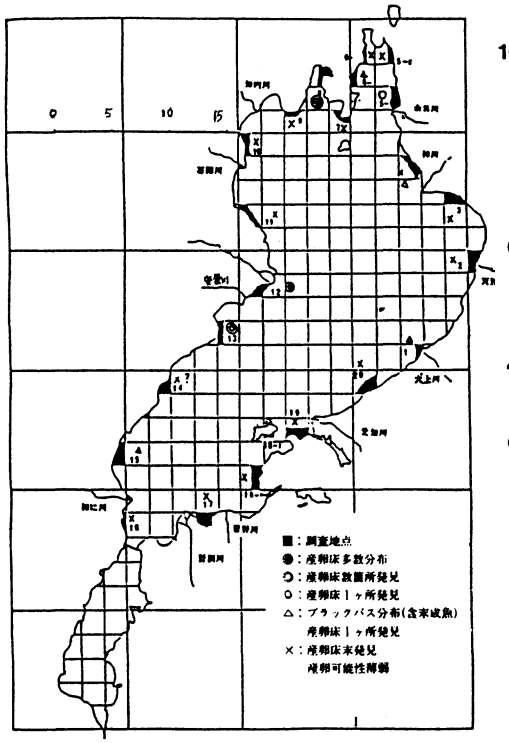

図1　ブラックバス産卵場調査地点図

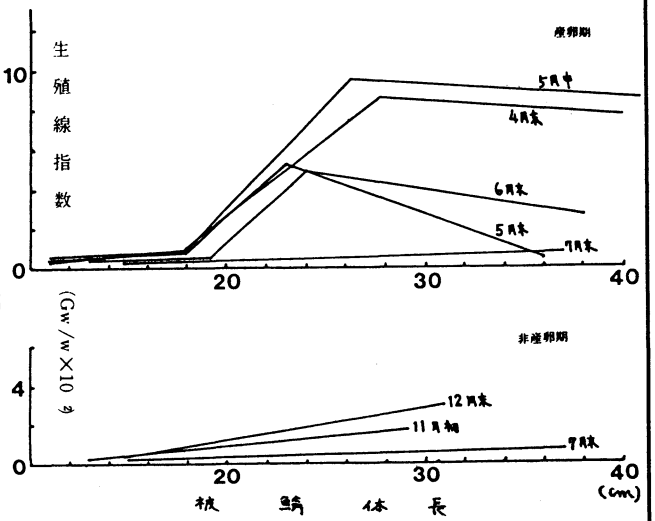

図2　琵琶湖産ブラックバスの月別・被鱗体長一生殖腺係数：関係
（雌）

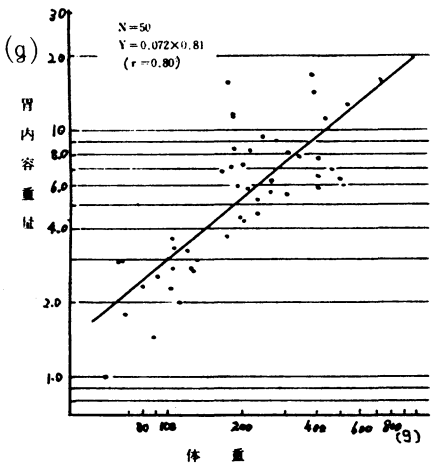

図3　体型と飽食胃内容重量との関係

表1　胃内容物の種類

餌料生物の種類	個体数（尾）	比率（%）
魚類のみ	33	25.98
魚類とエビ類	34	25.99
エビ類のみ	33	25.98
陸棲昆虫	2	1.57
魚類＋陸棲昆虫	1	0.79
魚類＋エビ類÷貝類	1	0.79
魚類÷貝類	1	0.79
エビ類＋水棲昆虫	1	0.79
その化植物）	2	1.57
空胃	20	15.75
計	128	100.00

9　今後の問題点

(1)　撲滅に向けての実地試験
(2)　資源量の推定と、今後の量的変動の予測（漁獲魚の年令等）
(3)　有効利用方法の開発
(4)　他の水産物への影響の解明

10　次年度の具体的計画

一応62年度が、とりまとめの年となるので、過去2年間で得た知見をもとに補足的調査（例えば南湖の産卵場調査）と、撲滅に向けての試験（例えば、ブラックバス卵の物理的衝撃に対する抵抗性）などを行う予定である。